



小学校合同体験学習

1月17日、古里小学校と氷川小学校の6年生が合同で、「TGG GREEN SPRINGS」での体験学習を行いました。

到着すると早速外国人スタッフが、英語で歓迎してくれました。小学生もTGGの中では、すべて英語を使ってコミュニケーションを取ります。シャワーのように英語を浴びて、初めは戸惑う児童もいましたが、すぐに慣れてどのグループからも笑い声が聞こえるようになりました。午前中は、飛行機に乗って外国に行き、さまざまなお店で買い物の疑似体験をしました。午後は「木」をテーマにグループでデイスカッションをして、クイズやプレゼンテーション資料を作成し、他のグループに発表しました。

英語表現が分からない場面もありましたが、最初に確認した約束事、「間違いを恐れずにチャレンジする」ということを実践して、一生懸命コミュニケーションを取り続けました。楽しみながら有意義な体験をすることができました。

報告 千代有彩



第231号
発行

奥多摩町教育委員会

令和5年2月1日現在
児童数 148名
生徒数 56名
教職員数 45名

TOKYO GLOBAL GATEWAY

東京都英語村 体験型英語学習施設へ



奥多摩中学校体験学習

2月6日、奥多摩中学校2年生が、昨年度まで実施していた江東区青海の施設ではなく、今年度から開設された立川の施設でTGG体験学習を行いました。

午前中は、外国を模した疑似空間で日常英会話にチャレンジしました。旅行会社のカウンターで

会話、薬局での薬の購入、そして、ファスト・フード店で好みの品物の注文を体験しました。授業の中で学んだ範囲の英語がほとんどでしたが、初めて会った方と英語で会話することは、あまり経験がなかったため、生徒たちは緊張気味に会話をしていました。

午後は演劇に挑戦です。指導者は英語しか使わないので、まさに英語漬けの時間となりました。全参加者が、みんなの前で英語のスキット（寸劇）を演じることができました。

この日の体験をこれから英語学習に生かせるようにしていきたいと思っています。

報告 佐藤修



東京都小学生科学展

古里小学校6年生の木村鴻太郎さんが、1月8日、日本未来科学館で行われた「小学生科学展」で研究発表をしました。

鴻太郎さんの研究テーマは「アリの好み」です。アリが必要としている栄養や、好きな味を知りたいと思ったことが研究のきっかけでした。



古里小学校6年
木村 鴻太郎さん

古里小学校の校庭の片隅で暮らすクロオオアリの巣の周りに、砂糖・昆虫ゼリー・魚肉ソーセージ・塩・醤油・ワサビなど、計8種類の食べ物を置きました。その後、30分間様子を観察し、アリの好みを探りました。

実験の結果は次の通りです。「食べ物を取る順番と集まった数の両方で一番多かったのが昆虫ゼリー、次に魚肉ソーセージ、

続いて砂糖でした。塩にもアリは集まり、運んでいました。よく観察すると、醤油を吸ってお腹が膨らんでいるアリがいたことにも気付きました。ちなみに、ワサビには一匹も集まりませんでした。」このような結果から、鴻太郎さんは次のようにまとめました。「主に塩分や糖分、肉を好むと言えます。予想通り、糖分を含む食べ物に集まっていたので、アリは甘いものが好きなのことが分かりました。実験をする前には、塩は食べないと思っていたけれど、運んでいく様子が見られて驚きました。」



子どもからの メッセージ発表会

12月3日羽村市プリモホールゆとろぎで開催された発表会で、氷川小学校6年生、八鍬穂風さんのメッセージが発表されましたのでご紹介します。



氷川小学校6年
八鍬 穂風さん

【いじめのない世界をつくるために】

私は前に、主人公がいじめを受けて、学校に行けなくなってしまうたという本を読んだことがあります。そのことをきっかけにいじめについて考えました。いじめのない世界をつくるために私は、お互いを理解し、認め合うことが大切だと考えます。なぜなら、お互いのことが理解できれば、新しい視点で物事を見ることができ、いじめも少なくなっていくと思うからです。私が読んだその本には、見た目が人たちがうからという理由で、いじめられたことのある人、

母親が外国人だからというだけで失礼なことを言われてしまった人など、様々な事情をかかえた人が登場します。それを読み終えて一番最初に私が考えたのは「どうして見た目やたったの一言だけで、いじめが起こるのだろう。」ということでした。人はなりたくてその見た目になったわけではないし、人はそれぞれちがった意見を持っています。なのに、それを理由に人をいじめたり、差別をしたりするのは絶対にあってはならないことです。そして、何の罪もない人を一方的に傷つけて楽しむというのはそれこそ罪なのではないでしょうか。このような理不尽な悲しみをなくすには、お互いを理解し、きちんと認めるといのが大切だと考えます。いじめが起こる原因の一つに、相手のことを分かり合えないというのがあると思います。その原因をなくすために、相手がなぜそう考えているのかを理解しようとするのが大切です。これから私も、いじめをなくす一歩だと思いい、相手の意見に納得できなくても、どうしてそう考えたの

かを理解し認めていきます。まずはみなさんも、相手のことを理解することから始めてみると、知らなかった相手の良い一面が見えるかもしれません。

**全国中学生人権作文コンテスト
東京都大会 奨励賞 受賞**

奥多摩中学校3年生の堀明梨さんが奨励賞を受賞しましたのでご紹介します。



奥多摩中学校3年 堀 明梨さん

【存在に気づく】

去年の春休み、私は大学生の友達と遊園地に行きました。私はその遊園地が大好きで行くのをずっと楽しみにしていました。遊園地の中は混んでいたのですが、友達が先に歩いて私を連れて行ってくれました。しかし、その友達が後ろの方を二度見したらいきなり立ち止まって、歩いてきた方に戻り、道端にいる人が駆け寄っていききました。私は何があったんだろうと、しばらく状況が飲み込めませんでした。

よく見ると、その人の側には白杖がありました。しばらくするとスタッフの人が来て、友達が戻ってきました。話を聞くと「目が見えなくて、どこに飲み物を置いたのか分からなかったみたい。」と話していました。私はそれを聞いて、たくさんの人がいる中で気づいた友達に対して、「すごい！」と思ったのと同時に、全く気づけなかった自分が不甲斐ないと思いました。そう思ったのには理由があります。私はその出来事が起こる前に、チャリティーキャンペーンのラジオを聴いていたからです。私はそのラジオで、視覚障害者の声を聞き、その人達の気持ちをはじめて知りました。「会った時には、ぜひ勇気を出して声をかけて欲しい。」と話していて「話しかけていいんだ、あまり会ったことはないけど、会った時には声をかけられるように頑張ろう。」とも思いました。しかし、今回の出来事で何も出来なかった私は、「次に同じような状況で、その友達がいなかった時、どうやったら気づけるんだろう。そ

してどうやったら助けられるのかな。」と思って遊びながらも、頭の片隅にその問いが残り続きました。

そして家に帰ってから、私はどんな状況でも白杖に気づきたいと考える様になりました。私はラジオを聴いて、視覚障害者の助けとなるために声をかける一歩が必要だと学びました。しかし、声をかけるにはまず、その存在に気づかなければならないのです。周囲に、視覚障害者である事を知らせる役割を持つものとして白杖があります。他にも障害を持つことを示すヘルプマークなどがあります。しかし、今まで私は、白杖やヘルプマークなどを持っていない人により会ったことがないと勝手に思っていました。しかし、今回のことをきっかけに、本当は自分が白杖などを持っている人に気づけなかったただけではないかと考えました。

総務省のアンケートで、視覚障害者が外出時に困ることや不安に思うこととして、乗り物や公共施設の利用が不便であったり、車などに身の危険を感じる

など、その他にも様々なことが挙げられていました。そこから、視覚障害者はたくさん場所が困ったり、不安に思っていることがあると分かりました。だから、私はどんな場所でも視覚障害者の存在を意識したいと思いました。しかし、どんな状況でも白杖に気づくのは無理ではないかという意見もあると思います。特に最近では、外出時にスマホを使う人が多く、周りの人を目を向ける機会が減っているかもしれません。しかし、一人一人が意識することで、周りの人全員が気づかなくても誰か一人が気づけば、助けになると思います。

私は助けを必要としているが、声に出せない人達に気づくため、常にその存在を意識することが大切だと考えました。友達が助けた人は、勇気を出して遊園地に一人で来たのだと思います。もしかすると、助けがなかったら一日を十分に楽しめなかったかもしれません。どんな人でも気兼ねなく、何事も楽しめる世界を作るために、まずは自分の意識を変えていきたいです。



古里小学校 近況報告



古里小学校では、11月18日と19日に学芸会を開催しました。

18日の児童鑑賞日には、他学年の発表に大きな拍手を送る子どもたちの姿がありました。

普段何気なく接している他学年の子が今、目の前で役になりきって演じている。いつもとは違うその姿に、新しい発見や気付き、感動があったようです。19日の保護者鑑賞日も、子どもたちは張り切って臨んでいました。学芸会のスローガンである「本気の演技が伝わるように、全力で取り組み」を達成すべく、熱演していました。劇は一人だけの頑張りで成り立つものではありません。子どもたちはこの学芸会の取組を通して「一人はみんなのために、みんなは一人のために」行動することの大切さを学びました。「演じる」という経験から、更に一歩、成長することができたと感じました。

報告 藤田 誠司



1年生
「おおきなかぶ」



2年生
「ザ・ピーチ」



3年生
「三まいのおふだ」



たんぽぽ・ひまわり学級
「いつも ちこくの おとこのこ」



4年生
「少年少女冒険隊」



5年生
「走れメロス」



6年生
「男はそんだ 女はそんだ」

氷川小学校 近況報告

アートフェスティバル

11月23日と24日に、アートフェスティバルを開催しました。

2年前は、「展覧会」で、図画工作科で作成したものを中心に作品展示をしていました。今年度からは、「アート」ということで、作品展示に加えて、音楽科で練習を重ねた合奏と合唱を披露しました。

第1日目の23日に、体育館で、音楽発表会を行いました。



息を揃えて演奏した全校合奏

保護者や地域の方などたくさんの方が参観し緊張する中でしたが、本番までたくさん練習を重ねてきたことから、全学年が自信をもって舞台に立つことができました。6年生が中心になって取り組んだ、全校合唱・全校合奏は、聞いた方々から称賛をいただけるよいものになりました。大きな拍手を受けて、児童は努力することのよさを実感できたと感想で発表していました。



高学年の造形活動の様子

低・中・高学年ごとに、造形活動も公開しました。多摩美術大学の学生がゲストティーチャーになり、日頃の授業とは違った芸術作品の作り方を教えてもらいました。報告 一場 俊輔

校内研究の取組

本校は今年度校内研究のテーマを、「根拠をもって伝え合うことのできる児童の育成」教科等横断的な視点に立った実践を通して」として、6学年すべてで研究授業を行い、主に思考力・判断力・表現力の育成を図っています。

本校では、日常的に「相手意識」と「目的意識」を高める指導を行い、学習や生活の場において積極的に対話を行う場面を設定しています。対話の効果をよりよいものにするために、各

教科の「見方・考え方」を育て、自分の意見の根拠にするための指導方法を、教職員が一丸となって研究しています。

今年度計画していた研究授業はすべて終了し、現在は今年度のまとめに取り掛かっています。一年間掛けて築き上げてきた内容は、学校ホームページにアップロードする予定です。本校のホームページを、ぜひ御覧ください。

また、来年度は研究発表会を開催する予定です。

報告 国井 樹貴

氷川小学校 校内研究が目指すもの

根拠をもって
伝え合う子ども



各教科の見方・考え方

例：算数の見方・考え方
事象を数量や図形及びそれらの関係などに着目して捉え、根拠を基に筋道を立てて考え、統合的・発展的に考えること

相手意識

誰に向けて

目的意識

何のために



氷川小学校ホームページ
<https://www.rlco.jp/hikawasyo/>
(左側のQRコードも御利用いただけます)

奥多摩中学校 近況報告

第2学年移動教室

「全体で協力し合って、礼儀を忘れずに楽しもう」のスローガンを掲げ、1月18日～20日、2泊3日でスキー移動教室を新潟県岩原スキー場にて実施しました。コロナウィルス感染防止のため、健康観察を入念に行った上での実施となりましたが、第2学年20名全員が健康な状態で参加することができました。

天気も心配されましたが、関越トンネルを抜けると、一面の銀世界と青い空が私たちを迎えてくれました。



をいただき、いよいよ講習開始。初級班と中・上級班に分かれての講習です。スキーが初めての生徒が多数いる初級班では、何度か転びながらも諦めず、最終日にはリフトに乗って滑ることができました。中・上級班も長いコースを綺麗なフォームで何度も滑っていました。

今年度は、実行委員を中心に生徒の主体性を尊重しながら、「自分たちの力でやりきる」ことができるように取り組んできました。試行錯誤しながらの挑戦、自分たちの力でやりきったことは生徒にとってかけがえない経験になったと思います。

報告 加藤翼

奥多摩中学校カルチャー部
写真集「RYOKU FUJ」作成

奥多摩中学校のカルチャー部では、おくてん実行委員会と連携し、町を訪れる人に地元の知られざるよさを紹介するため、奥多摩の素敵な写真集を作りました。町内の事業所や図書館にて閲覧できます。



町小学生スキー教室開催

1月20日から21日に新潟県湯沢高原スキー場にて、3年ぶりに小学生スキー教室を行いました。古里小学校10名、氷川小学校9名の計19名の参加となりました。

参加者の半数以上が初心者でしたが、講師の皆さんの分かりやすい指導のもと、充実したスキー教室となりました。



おめでとうございます



1月9日に文化会館にて開催されました。出席された29名の方々の20歳をお祝いしました。

二十歳を祝う会開催

卒業式

【学校式典のご案内】

古里小学校

3月24日（金）午前9時30分

氷川小学校

3月24日（金）午前9時45分

奥多摩中学校

3月20日（月）午前9時30分

入学式

古里小学校

4月6日（木）午前10時30分

氷川小学校

4月6日（木）午前10時00分

奥多摩中学校

4月7日（金）午前9時30分

石田充法氏
地域文化功労者表彰を受賞

石田氏は、昨年の令和3年度東京都功労者表彰（文化功労）受賞に続く2年連続の受賞。

石田氏は、公立中学校教諭、教頭、校長を歴任される傍ら、昭和54年から奥多摩町文化財保護審議委員、平成27年からは同会会長を務められています。40年以上にわたる奥多摩町における文化財保護に対する功績が称えられ、この度文部科学大臣から表彰されました。11月15日秋晴れの中、京都府立府民ホールでの授賞式には御夫妻で招かれました。

❖教育相談室より❖

みんな、完璧じゃないから
スクールソーシャルワーカー

堀部 浩子

ゴミを自力で拾えないゴミ箱型ロボット、言葉を間違えながら読み聞かせをするお話ロボット…。完璧ではないローテクノロジーな、「弱いロボット」をご存じでしょうか。人はこのようなロボットを見ると、思わず手助けしたくなるなど、人の行動や優しさを引き出す働きがあるそうです。研究者である岡田美智男教授は、「自分よりも弱い存在（ロボット）がいることで、子ども自身の自己肯定感や自信の形成につながる」と話しています。人は、誰かの役に立ったり手助けできたりすると喜びを感じます。つまり弱いロボットには、他者への関心やいたわりを育てる力があるということですね。

長年愛されるキャラクターたちにも、弱い部分、いわゆる「まぬけ」なところをチャームポイントとする子が多くいます。人はまぬけなところを見せてくれるキャラクターに、親近感と安心感を覚えるそうです。心理の仕事をしていると、間違えることを恐れていたたり、完璧にできない自分を許せなかったりする方々と多く出会います。子どもたちにも、そのような傾向を感じることがあります。昨今、誰かの役に立ったり成功したりする経験がなかなかできないのかもしれませんが。人間は誰しも間違いや過ちを犯し、そのたびに反省し、成長します。しかしどうしても隣の芝生が青く見えてしまう瞬間は、生きていくと何度も訪れます。完璧にできない自分に嫌気がさしたとき、「みんな完璧じゃないから愛される」、そして「まぬけなところも可愛らしい」と、どうか思い出ししてください。そして、そんなあなたを支えたいと思っている人がいるということも。

教育相談室では、御家庭やお子様についての御相談と一緒に整理し考えるお手伝いをしています。お気軽に御相談ください。

【云・FAX】（83）2340

【メール】

okusoudan@town.okutama.tokyo.jp

郷土奥多摩(文化財)

その27

国指定特別天然記念物

ニホンカモシカ

文化財保護審議会委員

堀口行雄

当地に長くお住まいの方なら、何度か野生動物に出会ったことがあるのではないだろうか。

奥多摩は東京都に属しながら野生動物の宝庫といわれ、本州に生息する野生動物の大半が当地にも生息していると考えられています。中でもニホンザル(以下「サル」と略)やニホンジカ(以下「シカ」と略)はお目にかかる機会が多いです。

サルは街中にも頻繁に現れますし、シカは少し集落から外れば目にする機会はそれほど珍しいことではありません。ただ近年はサルやシカが増え、特にシカによる被害は深刻です。ま

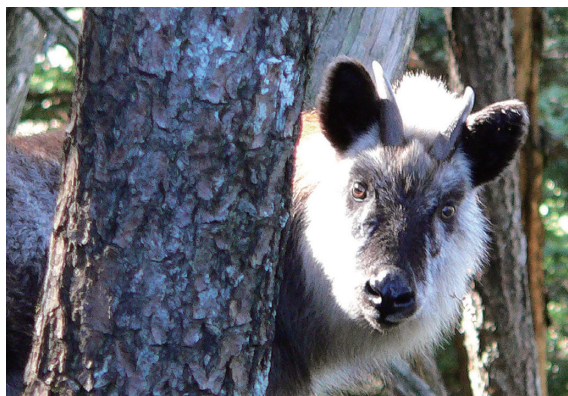
ています。

今回テーマのニホンカモシカ(以下「カモシカ」と略)もそんな野生動物の一種です。

カモシカは北海道と中国地方を除いた本州・四国・九州の山地帯に生息する日本の固有種です。学術的な貴重性が認められ、昭和9年に国の天然記念物に指定されましたが、第二次大戦後、良質な肉と皮を目的とした密猟等によって分布域が縮小し、地域的な絶滅の危機にありました。そのため、昭和30年に特別天然記念物に昇格指定され、保護政策がとられてきたことで、近年は個体数が回復し、分布域が広がっているようです。

カモシカは名前こそ「シカ」と呼びますがウシ科の動物で、ウシやヤギに近い種類です。シカに比べ動きは緩慢ですが、走り出すとけっこう速いです。

カモシカは比較のおとなしい性格で、人に危害を加えることはありません。出会っても無闇に騒ぎ立てず静かに様子を見守っていれば、帰巢本能がありしばらくすると山に帰っていきます。



目付きは鋭い

カモシカは病気の個体を除き、あまり街中に出てくることはありませんが、少し人家から外れた場所、例えばむかし道周辺や海沢林道、奥多摩湖駐車場の裏手などで数回出会ったことがあります。特に最近は海沢林道で頻繁に出会います。極端に近づかない限りジツとこちらを見ていることが多いです。しばらく睨みあった後、背を向け山中へ入っていきます。襲ってこないのは分かっているのですが、さすがに睨み合いは緊張します。サルやシカは頭数が増え、えさ不足などの要因もあり、市街地にも出没し、奥多摩に限らず、



海沢林道に現れたカモシカ

全国でトラブルになっていますが、カモシカはそれほどではないようです。サルやシカは伝染病の話は聞きませんが、カモシカは一定程度頭数が増えると伝染病が発生し、自然淘汰されるようです。

普段、ほとんどお目にかかることのない市街地に野生動物、サル等が出没するとマスコミをはじめ大騒ぎになります。少々滑稽に感じるのは私だけでしょうか。野生動物が排除され、人間しか住まないような市街地がよいのか、人と野生動物が共に暮らせる環境に住むのがよいのか、皆さんはどう考えますか。